

六百句

高浜虚子

青空文庫

序

さきに『ホトトギス』五百号を記念するために、改造社から『五百句』という書物を出し、また『ホトトギス』五百五拾号を記念するために、桜井書店から『五百五十句』という書物を出した。今度また菁柿堂せいしどうの薦めすすによって、『ホトトギス』六百号を記念するために『六百句』という書物を出すことになった。

これは昭和十六年から、昭和二十年までの句の中から選んだものである。『五百句』の時と同じく句数は厳格に六百句と限ったわけではなく多少超過しているかもしれない。

昭和二十一年九月十一日

小諸山廬こもろさんろにて

高浜虚子

昭和十六年

初はつ風なぎや大きな浪のときに来る

一月元日 由比ゆいヶ浜はま散歩。

大仏に袈裟けさがけ掛かけにある冬日かな

一月三日 家庭俳句会。鎌倉八幡宮初詣。南浦園。

枯菊ききくを剪きらずに日毎ひごとあはれなり

一月十日 草樹会。一ツ橋。学士会館。

苞割つとれば笑みこぼれたり寒牡丹かんぼたん

寒燈にいつまで人の佇たたずみぬ

一月十三日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

冬日濃き所を選みたもとほる

一月十六日 杣男そまお招宴。東品川、玉泉閣。

過ぎて行く日を惜みつつ春を待つ

餅もちばな花はなに出しひつこめし顔きれい綺麗

一月十七日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

映画出て火事のポスター見て立てり

一月二十一日 銀座探勝会。金こんばる春映画館。

喰くい積つみにとき／＼動く老の箸はし

一月二十二日 「玉藻五句集（第四十八回）」。

この辺の人氣は荒し海苔を干す

一月二十二日 物芽会。品川漁師町、洲崎館。

之を斯く龍の玉とぞ人は呼ぶ

一月二十三日 丸之内倶楽部俳句会。

凍蝶の翅におく霜の重たさよ

一月二十八日 二百二十日会。木挽町、田中家、水竹居招宴。

煤^{すす}けたる都鳥とぶ隅田川

二月八日 清三郎送別会。向島、弘福寺境内。普茶料理。

書乏しけれども梅花書屋かな

二月二十六日 三陽送別会。発行所。

書を置いて開かずにあり春炬燵^{はるごたつ}

三月十一日 二百二十日会。築地、新喜楽。

雛^{ひな}納^なめ雛^{ひな}のあられも色褪^あせて

三月十三日 七宝会。小田原、斎藤香村宅。

破^やれ傘^{がさ}を笑^{わら}ひさしをり春の雨

三月十四日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

人影^{ひとかげ}の映^{うつ}り去^さりたる水温^{ぬる}む

三月十五日 「玉藻五句集（第五十四回）」

経の声和し高まりつ花の寺

三月十七日 玉藻俳句会。上野寛永寺、渋沢堂。

春しゅんすい水をせせらぐやうにしつらへし

唄うたひつつ笑えまひつつ行く春の人

春草を踏み越えくはと鳩あるく

三月十九日 物芽会。芝公園蓮池、田川亭。

春雨や茶屋の傘休みなく
からかさ

三月二十三日 日本探勝会。鶴見、花月園。
つるみ

春泥に映りすぎたる小提灯
しゅんてい こちようちん

維好日日あたたかに風さむし
これこうじつ

三月二十七日 丸之内倶楽部俳句会。

神域の心得読むや花の下

神前に花あり帽をとり進む

三月二十八日 鎌倉俳句会。
大塔宮社務所。だいとうのみや

松の間の桜は幽かすかなるがよし

四月四日 家庭俳句会。上野公園。丸之内倶楽部日本間。

花にゆく老の歩みの遅おそくとも

風吹いて摘草の人居ずなりぬ

四月七日 調布小集。

やまのべ
山辺の赤人が好き ひとまるき

春泥やわが知る家の門の前

日当りて電燈ともり町桜

四月八日 二百二十日会。木挽町、灘万。白山招宴。

すみ
炉の隅に物捨甕も置かれあり

四月九日 暁 烏敏より書状あり、その末に、嘗て石川県北安田に其寺
を訪ひたる時の句しるしあり。

春雨の傘の柄漏りも懐しく
えも なつか

四月十三日 日曜日、大雨の中を妙本寺に
かいどう
海棠を見る。

門内の庭の広さや蚕飼宿
こがいやど

四月十八日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

散る花を悼む心も慌し
いた あわただ

四月二十一日 雉子郎を悼む。

閻王えんおうの眉まゆは発止はつしと逆立てり

四月二十五日 鎌倉俳句会。北鎌倉山ノ内、新居山円心寺、子育閻魔えんま。

窓外の風塵ふうじん春の行かんとす

四月二十六日 水無月会。日比谷公園、松本楼。

春水しゅんすいに落るが如くほとりせり

花の茶屋知りたる義理に立ち寄りぬ

五月一日 家庭俳句会。植物園、丸之内倶楽部日本間。

山莊の日々の掃除や余花の塵ちり

元禄の昔男と春惜む

五月五日 二百二十日会。日本橋区茅場町かやばちよう一番地、喜可久。其角きかくの三日
月の文台、藜あかぎの軸を見る。

病人に結うてやりけりしようぶがみ菖蒲髪

五月八日 七宝会。植物園。宝生会食堂。

この里の苗代寒むといへる頃

五月九日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

牡丹散る盃を銜みて悼まばや

五月十二日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

苗売の立ちどまりつゝ三声ほど

セルを着て白きエプロン糊硬く

五月十五日 木ノ芽会主催。二百二十日会招待。牛込若宮町、中村吉右衛門邸。

晴間見せ卵の花腐しなほつづく

山莊の庭に長けけり夏蕨

五月十六日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

ベンチあり憩へば蜘蛛の下り来る

五月二十一日 物芽会。品川神社社務所。

戻り漕ぐ船を手招ぐ人跣足もどこ はだし

石段を登り漁村の寺涼し

干魚ほしうおの上を鳶舞とびふ浜暑し

五月二十三日 鎌倉俳句会。小坪、小坪寺。

老侯のマスクをかけて薔薇ばらに立つ

五月二十四日 原宿、池田侯邸句会。

軽暖けいだんに病むといふ程ほどにてはなし

五月三十一日 昨夜新大阪ホテルに一泊。甲子園に佐藤紅緑を見舞ふ。

夏潮なつしほの今退ひく平家亡ぶ時も

六月一日 満鮮旅行への途次、門司着。福岡の俳人達に擁されて上陸。和め布刈かり神社に至る。門司甲宗八幡宮にて披講。「船見えて霧も瀬戸越す嵐かな 宗祇」の句を刻みたる碑あり。

壱岐いぎの島途切れて見ゆる夏の海

西日今沈み終りぬ 大対馬^{おおつしま}

壱岐低く対馬は高し夏の海

六月一日 門司より再び乗船、出帆。

タービンの響き^と籐椅子^{いす}に伝はり来

籐椅子^{とういす}に背中合せに相識^{あいし}らず

六月二日 朝濃霧、多島海の沖を通り大連へ向ふ。

牛も馬も人も橋下に野の夕立^{ゆだち}

六月四日 「あじあ」にて出発。鞍山駅にて土地の俳人諸君に面接。

網戸嵌めは只強ただくこそ住みなせり

六月四日 新京俳句会。兼題に「網戸」あり。

寄せ書よの葉書がきの上を柳りゆうじよ絮じよ飛ぶ

六月五日 新京ヤマトホテルに滞在。南湖に吟行。

沼ありて大江たいこう近き夏野かな

六月六日 ハルピン 哈爾濱に向ふ。ニユーハルピンに止宿。

つばくろ 燕やヨツトクラブの窓の外

江上の燕はつばめゆる緩くボートと迅し

部屋涼し奏樂起り着席す

六月七日 ヨツトクラブにて午餐舟遊。大和ホテルにて晚餐会。

かささぎまれ 鶺鴒も稀に飛ぶのみ大夏野

松花江しょうかこう流れて丘は避暑地とや

昼寝覚め又大陸の旅つづく

六月八日 奉天大和ホテル止宿。

緑蔭に入り北陵の側門そくもんへ

北陵の内庭草の茂るまゝ

龍彫りし陞の割目の夏の草

六月九日 午前北陵に行く。

朝鮮は初めてならず
古ふるすだれ簾

六月十日　お牧の茶屋。有志招宴。

水くねり流るる邑むらや柳かけ

茂しげやま山や植林治政三十年

田を植うる白き衣をかかげつつ

六月十一日　京城着、半島ホテルに入る。喜久井茶寮招宴。

牛曳ひきて春川みづかに飲ひにけり

六月十四日 東萊温泉、鳴門投宿。

梅雨つゆばれ晴の波こまやかに門もじ司せきケ関

六月十六日 山陽ホテルに少憩。

暫しばらくやは止みてありしが梅雨の漏り

六月二十四日 銀座探勝会。京橋こうさてん交叉点、片倉ビル前、明治製菓ビル別館二階。パーラー。

露の中毛虫よろほひ歩きけり

襖^{ふすま}みなはづして鴨居^{かもい}縦横に

七月四日 家庭俳句会。麴町、永田町、
日枝^{ひえ}神社東鳥居前。小泉亭。

ハンケチに雫^{しずく}をうけて枇杷^{びわ}すすする

七月六日 日本探勝会。杉並区浜田山、松本寛人邸。

夕闇^{ゆうやみ}の迷ひ来にけり 吊^{つり}葱^{しのぶ}

七月八日 玉藻句会。鎌倉、妙本寺庫裏。

山川にひとり髪洗ふ神ぞ知る

肌脱いで髪洗はんとしたるとき

七月九日 鎌倉俳句会。北鎌倉駅裏、中村七三郎宅。

静しずかに居うちわ団扇の風もたまに好よし

箱庭その反そり身みの漁翁君しに如しかず

忘れられあるが如ひくに日向なたみず水

めおと
夫婦らし 酸漿市の戻りらし

七月十日 七宝会。 西巢鴨にしすがも、近藤いぬる邸。 丸之内倶楽部俳句会。 丸之内倶楽部日本間。

しみ
紙魚の書を惜まざるにはあらざれど

よく化粧けわひよく著きこなして日傘さし

七月十一日 草樹会。 丸之内倶楽部。

縁台にかけし君見て端居はしいかな

水打てば夏蝶そこに生れけり

七月十四日 夏草会。愛宕山、嵯峨野。

示寂しじやくすといふ言葉あり 朴散華ほおさんげ

七月十七日 午後零時五分。川端茅舎永眠。かわばたぼうしや

霧濃こゆし 姫向日葵ひめひまわりのそよぎをり

投げ棄すてしまツチの火らし霧濃し

火虫^{ひむし}さへ燈下親しむべくなりぬ

八月十六日 句謡会。元箱根、松坂屋。

ほととぎす鳴きすぐ宿の軒端^{のきば}かな

櫂^{たすき}とりながら案内^{あない}や避暑の宿

八月十七日 句謡会。元箱根、松坂屋。

残したる任地の墓に参りけり

墓の道狭^せばめられたる参りけり

家^く建^りち^やて^や廚^ああら^はは^や墓^ま参^り

九月一日 「玉藻五句集（第五十五回）」

自^ま転^た車^かに^を跨^りが^り蟬^のの^木を^を見^上げ

縁^え台^{だい}を^を重^なね^を掃^きを^をり^り葭^よ簣^し茶^ち屋^や

九月五日 家庭俳句会。上野韻松亭。

夏^{なつ}木^きや^や衰^しへ^たれ^ど残^{のこ}暑^かな

百姓の木蔭こかげに休む残暑かな

秋の山首をうしろに仰ぎけり

九月六日 句謡会。鎌倉、香風園。

鰯いわし雲くも日和ひよりいよく定まりぬ

九月八日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

暖かき茶をふくみつつ萩の雨

長待ながまちの川蒸気やな秋の雨

九月十一日 七宝会。向島、百花園。

手を出せばすぐに引かれて秋の蝶

九月十五日 玉藻句会。市ヶ谷^{いち}左内坂上、長泰寺。防子追憶^や。

胸出して鳩のぼり来る落葉坂

大寺の戸樋^{とひ}を仰ぎぬ秋の雨

九月十八日 物芽会。芝山内、田川亭。

燭しよくを継ぐ孫弟子もある子規忌かな

その後のちの日月蝕じつげつしよくす幾秋ぞ

九月二十一日 日本探勝会。根岸、子規庵。

帯結ぶ肱ひじにさはりて 秋あきすだれ簾

九月二十四日 銀座探勝会。銀座西八丁目、ことき小時居。

本堂の隅すみなる蚊帳かやの吊手つりてかな

本堂の柱に避くる西日かな

駈かけり来し 大おお鳥からすちよう 蝶まんじゆしゃげ 曼珠沙華

九月二十六日 鎌倉俳句会。松葉ヶ谷、妙法寺。

藤ふじ袴ばかま 吾われ亦も紅こうなど名にめでて

九月二十九日 「玉藻五句集（第五十六回）」

松まつ茸たけの香りも人によりてこそ

十月二日 天台座主渋谷慈鎧より松茸を送り来る。

秋風に噴水の色なかりけり

見失ひ又見失ふ秋の蝶

十月四日 家庭俳句会。日比谷公園、丸之内倶楽部日本間。

新聞をほどけば月の芒すすきかな

十月五日 観月句会。品川、海晏かいあんじ寺。

菊其他キヤラメルも亦また供へあり

小時^{ことぎ}来て柘榴^{ざくろ}を供へ拝みけり

十月十二日 実花、小時、はん、防子の弔ひに高木に来る。小句会。

露の宿仏のともしかんがりと

弓少し張りすぎてあり鳥^{とり}威^{おど}し

十月十三日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

客稀^{まれ}に葭簣^{よしず}繕ふ茶屋主^{あるじ}

十月十五日 物芽会。上野公園。東華亭。

栗剥むげと出されし 庵ほうちょう 丁 大きけれ

十月十七日 鎌倉俳句会。たかし庵。

目にて書く大いなる文字秋の空

機織はたおり虫の鳴り響きつつ飛びにけり

十月二十四日 句謡会。鎌倉、香風園。

大木の見上ぐるたびに落葉かな

十一月七日 家庭俳句会。小石川植物園。

樽過ぐ時雨のすぐる如くにも

十一月十日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

虻澄みてつと移りて又澄みぬ

十一月十一日 二百二十日会。赤坂、高橋これきよ是清邸、今は公園となる。

かんざし みみかき
簪の耳搔ほどの草の花

冬の空少し濁りしかと思ふ

十一月十二日 句謡会。鎌倉、香風園。

びょうぶ
遠くより屏風の大字躍る見ゆ

ろくそう
六双の屏風に描く気魄かな

十一月十四日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

ろじぐち
路地口を曳き出る菊の車かな

菊車よろけ傾き立ち直り

十一月十五日 白草居還曆祝。丸之内ホテル。

蝶とまり獅子の睡りを醒しけり

焚火踏み消して闇なる鈴ヶ森

十一月十六日 日本探勝会。歌舞伎座。

大根を洗ふ手に水従へり

十一月十九日 物芽会。清水谷公園。皆香園。

大根を水くしやくくにして洗ふ

十一月二十一日 大崎会。丸之内俱樂部別室。

小春ともいひ又春の如しとも

十一月二十八日 鎌倉俳句会。寿福寺。

心ひまあればひいらぎ柊花こぼす

十一月三十日 寿福寺墓参。即事。

障子しょうじは貼りやめ日参を思ひたち

柀ゆきたけ丈も身にそひしこの古布子ふるぬのこ

十二月九日 二百二十日会。木挽町、灘万。

硝子ガラスど戸におでんの湯気の消えてゆく

戸すきの隙におでんの湯気の曲り消え

十二月二十一日 銀座探勝会。麴町永田町、真下宅。

惨さんとして驕おごらざるこの寒かん牡ぼ丹たん

十二月二十五日
町、松韻社。

松本長七年忌。句謡会、七宝会合併にて催。芝ことひらちよ琴平

昭和十七年

帽ぼうひさし 廂ひさし 滞りつつ冬日あり

一月三日 句謡会。鎌倉、香風園。

口あけて腹の底まで 初はつわらい 笑

おほどかに且かつ朗かに初笑

一切の行こころざし 蔵寒くらむにある思ひ

一月九日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

寒^{かん}玉^{たま}子^ご割^われば双^{ふた}子^ごの目^め出^で度^たさよ

一月十一日 遠藤梧逸招宴、星ヶ丘茶寮。

風^{かぜ}さつと焚^{たき}火^びの柱^{はしら}少^{すく}し折^おれ

一月十五日 七宝会。西巢鴨、近藤いぬる邸。

そのあたりほのとぬくしや寒牡丹

一月十九日 玉藻吟行。山王鳥居下、小泉亭。

妹^{いも}が居^いといふべかりける 桐火鉢^{きりひばち}

一月二十日 銀座探勝会。銀座五丁目、実花居。

海の日^{うみ}に少し焦^あげたる 冬椿^{ふゆつばき}

一月二十三日 鎌倉俳句会。浄明寺、たかし居。

マスクかけ^{ほの}灰^ほかに彼の眉目^{びもく}かな

一月二十九日 丸之内倶楽部新年会。愛宕山、嵯峨野。

油の目大きく二つ春の水

二月二十二日 ホトトギス同人会。虚子誕生祝を兼ねて。向島、墨田茶寮。

風折かざおりの烏帽子えぼしの如きもの芽あり

三月六日 家庭俳句会。日比谷公園。

春めくと思ひつつ執る事務多忙

三月九日 「玉藻五句集（第六十一回）」

好もしく低き机や雛の間ひいな

三月十日 二百二十日会。北鎌倉、中村七三郎宅。

濡れてゆく女や僧や春の雨ぬ

三月十七日 銀座探勝会。銀座四丁目服部時計店裏通り、日東紅茶喫茶部二階。

失せてゆく目刺のめざしにがみ酒ふくむう

三月二十日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

あやまつてしどみの花を踏むまじく

三月二十一日 調布宅小集。真砂子、立子、宵子、嵯峨、玲子と共に。

連翹れんぎょうの一枝円を描きたり

三月二十七日 鎌倉俳句会。北鎌倉、円覚寺えんがくじ仏日庵。時宗びょうの廟うら。

行き当り行き当り行く花の客

三月二十八日 高木 峽きょうせん 川 送別。 鶯うぐいすだに 谷、 伊香保いかほ。 越央子招宴。

騷そうじん 人にひたと閉とぎして花の寺

三月二十九日 丸之内会館、 藤 実ふじざね 艸そうそう 宇 招宴。

人々は皆芝に腰たんほほ黄き

たんぽぽの黄が目に残り障子に黄

四月三日 二百二十日会。 鎌倉要山、 香風園。

春惜むベンチがあれば腰おろし

四月九日 七宝会。小石川後樂園 涵徳亭。
かんとくてい。

美しき眉をひそめて朝寝かな

四月十日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

ぼうたんに風あり蛇あぶを寄らしめず

四月二十五日 即事。

遠足も今は駈かけ足あし池いけの端はた

五月一日 家庭俳句会。上野、韻松亭。

中途よりついとそれたる竹落葉

五月二日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

在ありし日の如くに集つどひ余花いおの庵

五月三日 水竹居追悼句会。深沢、赤星邸。

老農は茄子の心も知りて植ゆ

五月八日 草樹会。丸ビル精養軒。

打ち晴れし神田祭の夜空かな

年々に櫂の太る飼家かな

五月十五日 大崎句会。丸ビル精養軒。

顔そむけ出づる内儀や 溝 浚

釣堀に一日を暮らす君子かな

五月十九日 銀座探勝会。銀座金春。

妻をやる卵の花^{はな}くだし降るなかを

五月二十日 物芽会。山王境内、山の茶屋。

夕風に浮かみて罌粟^{けし}の散りにけり

五月二十二日 鎌倉俳句会。東御門、山田珠樹邸。

棟^{とうり}梁^{りょう}の材ばかりなり夏木立

五月二十三日 大雪崩会歓迎句会。鎌倉、香風園。

鮎釣りの岩にはさまり見ゆるかな

六月一日 前橋に行く。関口雨亭より、前に此の句ありたる由を聞く。

顔^{かんば}セを緑に染めて人^{きた}来る

六月六日 名古屋朝日クラブの会。八勝館。

黴^{かび}の中わがつく息もかびて行く

六月十一日 七星会。青山南町六丁目、春日。

やす扇ばりく開きあふぎけり

六月十二日 草樹会。丸ビル、精養軒。

木々の間を透^すきてしうねく西日かな

六月十三日 山彦句会。紀尾井町清水谷、皆香園。

蝶あわてとびまどひをり
草刈^{くさかりめ}女

六月十五日 玉藻吟行会。川崎、明治製糖。

山寺に絵像かけたり業平忌なりひらき

六月十六日 銀座探勝会。銀座七丁目、日本貿易協会。

夏木あり之これを頼たよりに葭簣茶屋よしず

六月十七日 物芽会。上野、東華亭。

しづくくとクローバを踏み茶を運ぶ

六月十九日 大崎会。
駿河台、日本出版文化倶楽部。

今日の興 泰山木の花にあり

六月二十日 二百二十日会。浅野白山邸。

昼顔の花もとび散る籬を刈る

一匹の火蛾に思ひを乱すまじ

蚊遣火のなびけるひまに客主

六月二十六日 鎌倉俳句会。鶴ヶ岡八幡宮社務所。

炎天や額の筋の怒りつつ

用ゆれば古籐椅子も用を為す

端居しぬ主まうけにくたびれて

七月九日 七宝会。西巢鴨、近藤いぬる邸。

宗祇忌を今に修することゆかし

七月三十一日 斎藤香村より箱根早雲寺に宗祇忌を修する由にて句を徴

されて。

雷火にも焼けず法燈ともりをり

八月三日 叡山横川中堂。
七月三十日雷火のため炎上。
渋谷慈鎧座主に贈る。

夜詣よまいりや茅ちの輪わにさせる社務所の灯ひ

向日葵ひまわりが好きで狂ひて死にし画家

向日葵を画布一杯に描きけり

八月八日 初めて実朝祭を修す。

活澆かつぼつにがたびしといふ音すずし

何事も人に従ひ老涼し

八月九日 「玉藻五句集（第六十五回）」

笑えみわれて泳ぎをる子は女の子

つばくろの飛び迷ひ居おり霧の中

八月十五日 句謡会。箱根元箱根、松坂屋。

時し化けらしく尚なおも朝寝をつづけけり

霧の中舟の掃除をはじめけり

八月十六日 句謡会。箱根滞在。

玉蜀黍もろこしを二人互ひみやげに土産かな

老の耳露ちる音を聞き澄ます

八月二十二日 山中湖畔さが下り山やま、楊やなぎの家にて俳句会。吉田、山中の俳人来る。

秋の蚊の歩をゆるむれば来り刺す

土の香は遠くの草を刈つてをり

木の股またの抱ける暗さや秋の風

秋しゅうとう灯とうの下に額を集めけり

九月四日 家庭俳句会。小石川植物園。

虫売の荷を下ろすときやかま喧しき

秋の蚊を手もて払へばなかりけり

九月五日 句謡会。鎌倉、香風園。

鈴虫を聴く庭下駄の揃へあり

九月九日 二百二十日会。木挽町、田中家。

苔の道こけすべにりしあとや墓まゐり

朝顔の鉢を置きたる墓の前

町中に少し入りこみ盆の寺

九月十日 七宝会。小石川白山^{はくさん}、心光寺。

萩を見る俳句生活五十年

山霧に懷中電気ともしつつ

燈下親し山の庵^{いおり}にひとりをり

九月十一日 草樹会。丸ビル、精養軒。

悲しさはいつも酒気ある夜学の師

夜学の師少なき生徒ひとなが一眺め

へつらうが如き夜学の教師かな

九月十二日 丸之内倶楽部俳句会。

月見までまだ日数ありよしひおい葭日覆

だしぬけに吹きたる風も野のわき分めき

九月十四日 笹鳴会。駿河台、日本出版文化倶楽部。

秋の蠅はえ少しく飛びて歩きけり

わが前の畳に黒し秋の蠅

九月十五日 銀座探勝会。松屋裏対岸、朝日倶楽部。

大いなる団扇^{うちわ}出てゐる残暑かな

起きてゐる娘^この宿^とを訪^とふ野分かな

九月十六日 物芽会。麴町永田町、真下宅。

握り見て心に応^{こた}ふ稲穂かな

九月二十一日 朝日新聞の需もとめに応じて豊年の写真に題す。

子規墓参それより月の俳句会

わが墓参済むを静かに待てる人

九月二十六日 観月会。上野公園寛永寺。

去来きよらい忌ぎやその為ひととなり 人 拝みけり

十月九日 草樹会。丸ビル、精養軒。

やや寒や日のあるうちに帰るべし

十月十二日 笹鳴会。駿河台、日本出版文化倶楽部。

呉れたるは新酒にあらず酒の粕かす

十月十六日 大崎会。駿河台、日本出版文化倶楽部。

つぎくに廻り出でたる木の实こ独楽みごま

十月十九日 立春会。鎌倉大仏裏、藤波別荘。

茄子なす畠ばたは紺一色や秋の風

黄葉もみじして隠れ現る零余子蔓むかごづる

けふの日も早や夕暮や破芭蕉やればしろう

十月二十三日 鎌倉俳句会。逗子ずし在、久木、岩殿観音。

到来の柿庭の柿取りまぜて

十月二十七日 遠藤為春主催、五月雨会別会。麻布六本木、大和田。

口に袖あててゆく人冬めける

十一月六日 家庭俳句会。芝公園、蓮池茶屋。

足さすり手さすり寝ぬる夜寒かな

十一月七日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

卓上に手を置くさへも冷めたくて

十一月九日 笹鳴会。駿河台、日本出版文化俱樂部。

この人や時雨しぐれのみにて律する非

十一月十一日 伊賀上野市より芭蕉三百年祭。祝句を徴されて。

手慣れたる木目を撫でて桐火鉢

踏石を伝ひさしたる冬日かな

十一月十二日 七宝会。本郷西片町、麻田権花邸。

籬あり菊の凭るるよすがあり

十一月十三日 草樹会。丸之内倶楽部。

鳩立つや銀杏いちよう落葉をふりかぶり

十一月十七日 浅草探勝会第一回。浅草公園三社さんじゃ様社務所。

落葉吹く風に追はれて地下室に

十一月十七日 銀座探勝会。日比谷、森永。

冬ぬくし日当りよくて手狭てせまくて

十一月十八日 物芽会。芝公園、蓮池茶屋。

ついくくと黄の走りつつ 枯かれすすき 芒せき

風の夜の灯ともしびうつる 水みず溜たまり

十一月十九日 下山霜山招宴。川合玉堂、中村吉右衛門などと。芝公園、浪花屋。

泉石せんせきに魂入りし時雨かな

天地あめつちの間にほろと時雨かな

十一月二十二日 長泰寺に於ける花蓑追悼会に句を寄す。

浮き沈むにお鳩の波紋の絶間たえまなく

十一月二十六日 丸之内倶楽部俳句会。

灯ひともせば忽たちまち仏寒からず

十一月三十日 二百二十日会。銀座松屋裏、尼寺。

死ぬること風邪かぜを引いてもいふ女

鞆かばんあけ物探さがす人冬木中

十二月四日 家庭俳句会。日比谷公園、丸之内倶楽部。

これよりは二上^{ふたかみ}時雨なつかしき

十二月八日 十二月十日、古川悦子結婚。二上山^{ふもとかたづ}の麓に嫁くと。

枯蓮^{かれはす}の池に横たふ暮色かな

十二月十日 七宝会。上野不忍池畔、雨月荘。

鳩^{におくび}の頸伸びしと見しが潜^{もぐ}りけり

十二月十一日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

冬木切り倒しぬ犬は尾を垂れて

碎かるる冬木は鉞なたの思ふまま

年木伐る右手に鉞としぎきを離さずに

十二月十四日 笹鳴会。駿河台、日本出版文化倶楽部。

金屏きんびように畳の縁は流れゐる

一双の片方くらし金屏風

十二月十五日 浅草探勝会。柳橋、田中家。

倉庫今船荷呑^のみをり雪もよひ

十二月十六日 物芽会。永代橋畔、都川。

又例の寄せ鍋^{よなべ}にてもいたすべし

十二月二十四日 丸之内倶楽部俳句会。

井戸端に飯に積み置く冬木かな

十二月二十五日 鎌倉俳句会。浄明寺、たかし庵。

挽^ひかれゐると知らでつつ立つ枯木かな

十二月二十八日 玉藻俳句会。小石川植物園。

暮れてゆく枯木の幹の重なりて

十二月三十一日 除夜詣。浅草観音。

昭和十八年

道のべの延命地藏古稀の春

一月七日 小石川、護国寺。

片づけて福寿草のみ置かれあり

初夢の唯空白を存したり

寒鯉の一擲したる力かな

一月八日 草樹会。丸之内倶楽部。

寒稽古病める師匠の厳しさよ

一月十五日 大崎会。丸之内倶楽部。

示したる一映像や都鳥

都鳥飛んで一字を画きけり

一月二十日 物芽会。永代橋畔、都川。

猫いまは冬菜畑を歩きをり

一月二十三日 鎌倉俳句会。極楽寺月影ヶ谷、渡利月影邸。

冬空に大樹の梢朽ちてなし

香煙にくすぶつてゐる冬日かな

一月二十五日 玉藻句会。大仏境内、南浦園。

いと低き土塀わたりぬ冬木中

一月二十六日 二百二十日会。築地二丁目、八百善。

大仏の境内梅にとおえしやく遠会とく積

二月二十一日 古稀祝を兼ね家庭俳句会。鎌倉、南浦園。

宿の梅あるじと共に老いにけり

二月二十二日 七十回誕生日に子供等集る。

家々の軒端の梅を見つつ行く

二月二十八日 鎌倉要山、香風園。古稀祝二百二十日会女連。

春蘭を掘り提げもちて高嶺の日

三月五日 景山筍吉招宴。霞ヶ関茶寮。

日をのせて浪たゆたへり海苔の海

三月九日 「玉藻五句集（第七十三回）」

春の水梭を出でたる如くなり

三月二十一日 大阪西区江戸堀、浜田止宿。立子、浜子と共に。「鹿笛」
吟行、京都桂に行く。

はせでら ほつとじろ
長谷寺に法鼓轟く彼岸かな

花の寺末寺一念三千寺

おんむね
御胸に春の塵とや申すべき

三月二十二日
阿波野青畝、
藤岡玉骨其の他と共に長谷寺吟行。

ハンドバツク寄せ集めあり春の芝

三月二十三日 関西夏草会。宝塚ホテル。

麗うらやかにふるさと人と打ちまじり

ふるさとに防風摘みにと来し吾われぞ

砂浜を斯かく行く防風摘みながら

三月二十九日 在松山。風早の西ノ下げに赴く。豊田、猪野いの等に迎へられ猪
野宅招宴。

紅梅に薄紅梅の色いろがさ重ね

四月二日 家庭俳句会。日比谷公園。

見るところ花はなけれどよき住居すまい

四月九日 草樹会。丸之内倶楽部。

今日ここの花の盛りを記憶せよ

一様に岸边の柳吹き靡なびき

四月十日 ホトトギス同人、虚子古稀祝賀会。不忍弁天生池院。池ノ端、
雨月荘。

芝焼いて旧居のままのたゞずまひ

四月十一日 水竹居追善句会。深沢、赤星邸。

沈じんちよう 丁ちようの香の石階いたたずに佇みぬ

四月十二日 笹鳴会。お茶ノ水、日本出版文化俱樂部。

謡うたい 会かい すすむにつれて夕桜

暮れければともし燈ともしを向けぬ家桜

四月十二日 望月龍、林周平招宴。木挽町、灘万。

藁^{わら}さがるけふは二筋雀^{すずめ}の巢

四月十六日 大崎会。お茶の水、日本出版文化倶楽部。

法外の朝寝もするやよくも降る

一蝶の舞ひ現れて雨あがる

四月十九日 横浜キリスト教青年会俳句会。

外^{がい}套^{とう}を脱げば走り来^き持ちくれぬ

四月二十日 浅草探勝会。
千住青物市場、為成菖蒲園居。

手にうけて開^あけ見て落花なかりけり

四月二十一日 物芽会。上野公園、東華亭。

寵^{ちようあい}愛の仔猫^{こねこ}の鈴の鳴り通し

スリツパを越えかねてゐる仔猫かな

四月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

息子^{むすこ}住む田舎^{いなかや}家に来て春惜む

行き過ぎて顧みすれば花しどみ

四月二十四日 九羊会兼調布俳句会。武蔵調布、友次郎宅。

尾は蛇の如く動きて春の猫

四月二十五日 冬扇会。小石川植物園御殿。

朧^{おぼろ}とは今日の隅田^{すみだ}の月のこと

脇^{きょうそく}息に手を置き春を惜みけり

四月二十六日 滿洲俳人会。柳橋、深川亭。

藤房ふじぶさの垂たれて小暗おくらき産屋うぶやかな

君とわれ惜春の情なしとせず

ふたりづつく行く春の塵

五月二日 金沢あらうみ海会員大挙上京。上野韻松亭。池之端、雨月荘。

著倒きたおれの京の祭を見きたに來り

五月九日 つるばみ会。鴨東、美濃幸。

薄暑はや日蔭うれしき屋形船

藤蔓の船の屋根摺る音なりし

五月十日 関西同人会並に文報会員。嵐山、花の家。

いかなごにまづ箸おろし母恋し

五月十二日 紀州和歌浦、望海楼。春泥招宴。

素^す裕^あの心にはなり得^あざりしや

五月二十一日 自殺せる若柳敏三郎を悼む。

簡単に新茶おくと便^{たよ}りかな

生きてゐるしるしに新茶おけるとか

六月十七日 「玉藻五句集（第七十六回）」

隣り合^みふ実^う梅^めの如くありし事

七月二日 伊藤葦^い天^{てん}来^りて『紅^く緑^り句集』に題句を徴す。

顧みる七十年の夏木立

草刈の顔は脚絆きゃはんに埋うずもれて

七月十日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

いつの間に世に無き人ぞ梅雨つゆ寒し

七月二十一日 五月二十五日大西一外逝去せし由、此日報あり。

そこにある団扇うちわをとりて寛くつろぎぬ

汗をかくなかぬなどの物語

昼の蚊の静かに来にし雅会かな

吹き上げて廊下あらはや夏なつのれん暖簾

七月二十五日 芝公園、浪花屋、下山霜山招宴。

立秋の雲の動きのなつかしき

八月八日 鎌倉八幡宮実朝祭献句。

悠ゆう久きゆうを思ひ銀河を仰ぐべし

八月九日 伊藤柏翠はくすい来り、小田中久二雄、菅波康平共に重態の由を語る。
句を作りて柏翠に托す。

温泉ゆの客の皆夕立を眺めをり

人走る滝見戻りの俄にわか雨

家二三ある山蔭に滝ありと

八月十二日 句謡会。箱根湯本、清光園。

自転車に花や線香や墓参り

大いなる蚊が出て喰くらふ早雲寺そうんじ

幾本の蟬せみの大樹や早雲寺

八月十三日 箱根、早雲寺。

日出いでて葉末はづえの露の皆動く

雲間より稻妻の尾の現れぬ

八月十五日より十八日に至る

山中湖畔。

新蕎麦しんそば俳句会。

秋風や顧みずして相別る

八月十五日より十八日に至る 山中湖畔。藤崎雀荘窪田を訪ふ。

秋雨を衝ついて人来る山の庵いお

萩はぎすすき 芒はぎすすき おほかた閉ぢし山の庵

萩はぎむら 叢はぎむら の中に傘干す山の庵

八月十五日より十八日に至る 山中湖畔。山廬。

選集を^{えら}選みしよりの山の秋

八月二十九日 吉田俳人七、八人来る。

狼^{ろう}藉^{ぜき}や芙蓉^{ふよう}を折るは女の子

芙蓉花の折り取られゆく花あはれ

九月三日 家庭俳句会。日比谷公園、丸之内倶楽部別室。

滝の威に恐れて永くとどまらず

九月七日 「玉藻五句集（第七十七回）」

凄^{すげ}かりし月の団蔵七代目

九月十日 成田の額堂に七代目団十郎の石像があつたが、久しく鼻が欠けたままになつてゐた（今は修覆されてゐるが）。七代目団蔵がこれを嘆き、六代目団蔵の像と共に別に銅像を建立した。今度襲名した八代目団蔵は、七代目団蔵追善供養の爲め、其後撤去した銅像の残された台石の上に句碑を立てることにした。

よべの月よかりしけふの残暑かな

九月十三日 笹鳴会。駿河台、日本出版文化倶楽部。

月を待つ人皆ゆるく歩きをり

九月十五日 観月句会。鎌倉山ノ内、東慶寺。

歌^{うた}膝^{ひざ}を組み直しけり虫の宿

九月十六日 物芽会。芝琴平町、松韻社。

過^{あや}ちは過^まちとして爽^{さわ}やかに

爽やかにあれば耳さへ明らかに

栓^{せん}ひねり水爽やかに^{ほとぼし}迸り

人々の皆爽やかに^{たのも}頼母しき

九月十七日 大崎会。駿河台、日本出版文化倶楽部。

交^{まじわ}りは薄くも濃くも月と雲

九月十八日 十七日夜七時十二分、永田青嵐逝く。

いつまでも用ある秋の^{しづうちわ}渋団扇

九月二十日 銀座探勝会。永田町、真下宅。

夕立ゆだち来て右往左往や仲の町き

ここはしも山口巴 秋あき簾すだれ

九月二十一日 浅草探勝会。吉原引手ひきて茶屋山口巴。

いつの間に壁にかかりし 帚は草はきぐさ

取りもせぬ糸瓜へちま垂らして 書屋しよおくかな

白萩ことの殊きたに汚きたなくなりやすく

九月二十三日 丸ノ内倶楽部俳句会。

鶏頭けいとのうしろまでよく掃かれあり

九月二十五日 「玉藻五句集（第七十九回）」

爽やかに屈托といふもの無しに

爽やかに皆面おも上げて真つ直ぐに

九月二十六日 鹿郎祝賀会。白山招宴。上野伊香保。

おはん居きよの屏風開びようぶひらきに招かれし

九月二十七日 おはん居。

木犀もくせいの香は秋の蚊を近づけず

十月二日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

北嵯峨さかの祭の人出見がに行かん

十月六日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

秋晴の少し曇りしかと思ふ

天高し雲行く方に我も行く

十月十三日 日比谷公園、松本楼。

白雲の餅の如しや秋の天

あの雲の戻り来るべし秋の晴

十月十四日 七宝会。小石川後楽園、涵徳亭。

椿の葉最も揺れて小鳥居る

秋の灯をともしんとして手をやりぬ

十月十八日 銀座探勝会。昭和通り、八重洲園。

マスクして早や彼ありぬ柳散る

十月十九日 浅草探勝会。公園茶店、宮戸川。

渡り鳥堤の藪やぶを木伝こづたひて

十月二十日 「玉藻五句集（第八十回）」

門の内掛かけいね稲いねありて写真撮とる

句碑を見て溝蕎麦みぞそばの逕左みちへと

秋晴あきの奇北高臥きほくこうがのところ是れ

十月二十一日 埼玉県須賀村に川島奇北の病を訪ひ、不動岡、迷子居めいしの
「桜草」同人句会に列す。

一塵いちじんを見つけし空や秋の晴

末枯うらがれの原をちこちの水たまり

氣安しや末枯草に且憩かつじひ

十月二十二日 鎌倉俳句会。笹目ヶ谷、星野宅。

枯蓮の水を犬飲むおびえつゝ

稲架はぎ遠くつらな連り隠れ森のかげ

十月二十四日 鶴ヶ岡八幡宮社務所。

茶屋に居て下なる茶屋の屋根落葉

十月二十五日 玉藻句会。王子名主の滝。

礎いしずえの下の豆菊は這はひ出でて

崩くずれ築やな水いたず徒らに激ししをり

十月二十八日 丸之内倶楽部俳句会。

秋晴もろてや諸手重ねて打かざち翳し

十一月二日 銀座探勝会。実業ビル六階。

初時はつしぐれ雨あめその時せじん世塵せじん無なかりけり

十一月七日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

両脚を伝ひて寒さ這ひ上る

十一月九日 二百二十日会。木挽町、田中家。

枯園かれそのを見つつありしが障子しめ

十一月十日 即事。

遠足の列くねり行く大枯木

十一月十一日 七宝会。上野花山亭。

一門の睦み集ひて桃青忌

切干もあらば供へよ翁の忌

紅葉せるこの大木の男振り

十一月十二日 吉右衛門一座、「嵯峨日記」を上演するにつき、芭蕉二百五十年忌追善会を上野清水寺客殿に催す。吉右衛門主催。

川下の娘の家を訪ふ春の水

十一月十五日
越前えちぜん三国、愛子居。

滝風は木々の落葉を近寄せず

廻廊を登るにつれて時雨冷え

木々紅葉もみじせねばやまざる御法みのりかな

今も尚なお承陽殿に紅葉見る

十一月十六日
越前永平えいへい寺。

川にそひ行くまま草の枯るるまま

十一月十七日 金沢市 逍遙^{しやうよう}。

北国のしぐるる汽車の混み合ひて

温泉^ゆに入りて暫^{しば}しあたたか紅葉冷え

不思議やな汝^なれが踊れば吾^{われ}が泣く

十一月十八日 山中、吉野屋に一泊。愛子の母われを慰めんと謡ひ踊り愛子も亦踊る。

無名庵に 冬籠せし心はも

湖の寒さを知りぬ翁の忌

十一月二十一日 大津義仲寺無名庵に於ける芭蕉忌法要。
於ける俳句大会。 膳所小学校に

後苑の菊の乱れを愛しつゝ

十一月二十二日 京都鹿ヶ谷。 ミュウラー初子邸。

ここに来てまみえし思ひ翁の忌

笠置路かさぎじに佛描おもかげく桃青忌

焚火たきびするわれも紅葉を一ト握り

掛稻の伊賀の盆地を一目の居

十一月二十三日 伊賀上野、友忠旅館。愛染院に於ける芭蕉忌。菊山九園
居。

四五日は冬ふゆ籠こもりせん旅がへり

冬籠その日早くも人の訃ふを

十一月二十四日 帰宅。

よつめがきうちと
四目垣内外の菊の乱れかな

十一月二十六日 鎌倉俳句会。極楽寺。

冬空を見ず 衆しゅじょう生しょうを視み大おお仏ほとけ

枯松の姿を惜み合へるかな

君を送り紅葉がくれに逍遙す

十一月二十八日 爽波そうは送別。杞陽きよう招宴。鎌倉大仏、南浦園。

話しつっ行き過ぎ戻る梅の門

十一月二十九日 玉藻句会。市川、佐川雨人居。

ただ中にある思ひなり冬日和ふゆびより

十二月三日 家庭俳句会。日比谷公園、丸之内倶楽部。

落葉吹く風に帚ほうきをとどめ見る

十二月四日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

枯草に犬尾を垂れてものを嗅かぎ

菜を負ひて歸りをりしが子罵ののしる

十二月五日 浅野白山還曆祝賀会。
鶯うぐいすだに谷、しほ原。

ほそぼそと残菊のあり愛あいしけり

十二月九日 七宝会。虚子古稀祝賀。

障子しめ自恃じたいあん庵とぞ号しける

十二月十日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

風邪引に又夕方の来りけり

十二月十一日 偶成。

人を見る目細く日向ひなたぼこりかな

十二月十二日 横浜キリスト教青年会俳句会。

炭を挽ひく静かな音にありにけり

十二月十四日 二百二十日会。清三郎招宴。築地、藍亭。

天気やゝおちたるかとも冬日和

十二月十五日 物芽会。上野公園、東華亭。

振り向かず返事もせずにおでん食ふ

干^{ほしぎ}筴の動いてゐるは三十三才

十二月十七日 大崎会。日本橋区三丁目、小島方。

うかとして何か見てをり年の暮

十二月二十日 銀座探勝会。築地河岸、朝日倶楽部。

枯木皆憐れみ合ひて立ちにけり

十二月二十二日 花鳥会。築地、田中家。

甘藷焼けてゐる藁の火の美しく

枯菊に尚ほ或物をとどめずや

起き直り起き直らんと菊枯るる

十二月二十四日 鎌倉俳句会。
片瀬かたせ、仙石隆子邸。

川の面もにこころ遊びて都鳥

十二月二十七日 玉藻句会。永代橋畔、都川。

昭和十九年

一人立ち障子をあけぬ 薬くすりぐい喰

一月十八日 中央俳句会。霜山招宴。九段上、魚久。

石に腰しばらくかけて冷めたくて

もの皆の枯れて別墅べっしょの閉しあり

一月二十三日 夕月会。鎌倉、南浦園。

初時雨しかと心にとめにけり

水餅の混雑しをる壺の中

一月二十九日 「玉藻五句集（第八十一回）」。二百二十日会初会。京橋

木挽町、田中家。

障子外通る許りばかや冬座敷

寒菊に憐みよりて剪きりにけり

一月三十日 「玉藻五句集（第八十二回）（第八十三回）」

倉庫の扉打ち開きあり 寒雀かんすずめ

二月五日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

雲よりも真白き春の猫二匹

二月七日 白山招宴。鶯谷、伊香保。

陶窯とうように探梅たんばい行こうの時すごす

二月十日 七宝会。麴町永田町、真下宅。

春めきし日なり子を連れ彼女来る

美しく残れる雪を踏むまじく

二月二十日
相模原^{さがみはら}吟行。

洋服の襟^{えり}をつかみて春寒し

三月三日 家庭俳句会。日比谷公園、丸之内倶楽部別室。

白酒の紐^{ひも}の如くにつがれけり

けふも亦^{また}春の寒さか合点ぢや

三月四日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

五女の家^に次女と駆け込む春の雷^{らい}

三月九日 七宝会。芝公園金地院境内、斎藤香村居。

土塊^{つちくれ}を一つ動かし物芽出づ

三月十三日 笹鳴会。お茶の水、日本出版文化倶楽部。

芽吹く木々おのゝ韻を異にして

三月十五日 物芽会。上野公園、東華亭。

娘この部屋を飯の書齋や沈じん丁ちよう花げ

うは風の沈す丁まいの香の住居すまいかな

三月十七日 大崎会。富士見町、桜間邸。

開帳の時は今なり南な無む阿あ弥み陀だ

三月二十日 銀座探勝会。松屋裏、尼寺。

駒繫こまなぐごと自転車を梅が下

かかはりもなく互に梅椿

三月二十四日 鎌倉俳句会。たかし庵。

犬ふぐり星のまたたく如くなり

三月二十七日 玉藻句会。鎌倉笹目谷、星野宅。

一時ひとときを庭の桜にすごさばや

四月二日 あふひ忌。青山、善光寺。

落椿おちつばき道の真中に走り出し

四月八日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

参詣さんけいの人に俄にわかな花の雨

四月二十三日 鎌倉鶴ヶ岡八幡宮社務所。

春風や離れの縁の小座蒲団こざふとん

四月二十四日 玉藻句会。鎌倉大町、高木宅。

楼上に客たり花は主^{あるじ}たり

山荘に客たり四方^{よも}の花にあり

もてなしの心を花に語らしめ

山吹や心舅^{しゆうと}の客にあり

四月二十五日 鎌倉山、岩田緑山荘に招かる。

手を挙げて走る女や山桜

四月二十七日 偶成。

蒼海そうかいの色尚存なおす目刺めさしかな

春雨のくらくなりゆき極まりぬ

木の芽雨めあめ又病むときく加餐かさんせよ

四月二十八日 鎌倉俳句会。東慶寺山内、木下春居。

江山こうざんの晴れわたりたる幟のぼりかな

五月五日 家庭俳句会。山王境内鳥居前、小泉亭。

繭相場まゆそうば 度拍子とひょうしもなく上るとか

此村に一步を入れぬ繭景気

よき蚕こゆへ正しき繭を作りたる

五月六日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

昨日今日客あり今日は牡丹き剪る

五月九日 二百二十日会。鎌倉草庵。

どこの蚊が最も痛き墓詣

五月十九日 故郷の池内、高浜両家の墓掃除を依頼しある波多野晋平におくる。

根切虫ねきりむしあたらしきこととしてくれし

六月二日 家庭俳句会。上野、韻松亭。

軽暖けいだんの日かげよし且かつ日向ひなたよし

六月三日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

道に立ち見てゐる人に早苗さなえとる

笠二つうなづき合ひて早苗とる

六月五日 横浜キリスト教青年会。鎌倉笹目、星野宅。

緑蔭あるじぎに主鷺すわ追ふ手をあげて

満目の緑すわに座る主かな

六月六日 芝白しろかね金、般はん若にやえん苑。

兎も角も落着き居れば暑からず

六月八日 七宝会。駒込、六義園。

箕を抱へ女出て来ぬ花菖蒲

六月九日 二百二十日会。鎌倉、極楽寺。

我打つて翻へり死ぬ蠅あはれ

六月十一日 夕月会。鎌倉要山、香風園。

夏蝶を見上げて彼女庭にあり

六月十三日 二百二十日会。蓬矢招宴、嵯峨野。

灯取虫稿をつがんとあせりつつ

帯に落ち這ひ上るなり灯取虫

六月二十日 夏草会。鎌倉要山、香風園。

何某の院のあとや花菖蒲

溝みぞまたぎ飛び越えもして梅落とす

時過ぎて尚なお梅落とす音すなり

六月二十一日 物芽会。鎌倉山ノ内、東慶寺。

灯取虫這ひて書籍の文字乱れ

六月二十二日 丸之内句会。丸之内倶楽部別室。

干ほし衣ぎぬは紺ひとえの单衣ひとえのよく乾かわき

蜘蛛虫くもを抱いだき四脚よつあし踏あみ延のばし

六月二十三日 鎌倉俳句会。極楽寺、渡利月影邸。

老の眼に、《チュ》とにじみたる蠅を打つ

六月二十七日 二百二十日会別会。杞陽招宴。鎌倉、喜好寮。

炎天に立出でて人またたきす

会あひのたたび花はな剪きる今日けふは額がくを剪きる

美うしき蜘蛛くも居ゐる薔薇ばらを剪きりにけり

黒ずんだ染みが美しくし孔雀草くじやくそう

七月三日 土筆会つくし。鎌倉草庵。

木を伐りしあと夏山の乱れかな

四五歩して夏山の景変りけり

石を撫し傍らにある百合を剪るぶ かたわ ゆり

七月九日 二百二十日会。鎌倉要山、香風園。

稍ややおくれたりといへども喜雨いた到る

七月二十日 即事。

辛しん辣らつの質さがにて好む 唐とう辛が子し

七月二十五日 「玉藻五句集」

加ふるに団扇うちわの風を以てせり

七月二十九日 二百二十日会。日ひねもす招宴。鎌倉要山、香風園。

日盛りは今ぞと思ふ書に対す

八月三日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

此このち後るすがちは留守勝すけかつならん萩はぎの庵いお

八月四日 山中湖畔さが下り山やま、山廬。

背中には銀河かかりて窓に腰

八月二十一日 「玉藻五句集」

此頃はほぼ其頃の萩と月

九月十日 九月四日、信州小諸こもろに移住。「奥の細道」第二回演能の由申来りたる桜間金太郎に寄す。

牛の子の大きな顔や草の花

九月十三日 志賀村に神津雨村こうづを訪ふ。

ラヂオよく聞こえ北佐久秋さくの晴

九月十七日 即事。

昼出でて秋の蚊らしくなりにけり

九月二十二日 土筆会。鎌倉草庵。

見渡して月の友^{ともがき}垣ならぬなし

九月三十日 観月句会。鎌倉亀谷、英勝寺。

子供等も重荷を負ふて秋の雨

籬^{かき}の豆赤さ走りぬいざ摘まん

稲刈りて残る案山子や棒の尖

十月五日 小諸俳人小会。林檎園、高木晴子居。

停車場に夜寒の子守旅の我

十月八日 土筆会員挙つて来る。小諸山廬。

諸君率て小諸町出て秋の晴

十月九日 土筆会員と近郊散策。

案内の宿に長居や 菌狩きのこがり

十月十一日 小山栄一に松茸狩に誘はれ武石たけしに到る。

これよりは山陰道の月暗し

十月十九日 十七日山本村家逝く、曩さきに泊雲さくも逝き今又村家亡なし。

虹立ちて忽ち君の在る如したちま
あ

虹消えて忽ち君の無き如し

十月二十日 虹立つ。虹の橋かゝりたらば渡りて鎌倉に行かんといひし三

国の愛子におくる。

与良よらうじ氏の墓木ぼぼぎよう拱もみじして紅葉もみじせり

十月二十四日 即事。

刈りかけし蘆あしいつまでも其のままに

十月二十七日 鎌倉俳句会。鎌倉八幡宮社務所。

秋晴の郵便函はこや棒ぼうの先

十月三十一日 句謡会。鎌倉要山、香風園。

各々おのおのは小諸寒しとつぶやきて

十一月五日 土筆会。小諸山廬。

迷ひゐる雲や浅間は雪ならん

舞もうてゐし庭の落葉の何いつ時かなし

蕎麦干そばして居てしぐるるを知らぬげに

山の名を覚えし頃は雪の来し

十一月六日 土筆会。小諸山廬。

時雨しぐると娘手かざし父仰ぎ

十一月九日 七宝会。小諸山廬。

山国の冬は来にけり牛乳ちちをのむ

からくと鳴り居る小夜さよのいねこぎ機

一塊の冬の朝日の山家やまがかな

十一月十日 七宝会。小諸山廬。

冬山路にわか俄にぬくき所あり

我わがさむさ訪とひ集つじひくる志

十一月十二日 信州俳句大会。小諸、小山栄一宅。

木こがらし枯に浅間の煙吹き散るか

十二月七日 素すじゆう十、春霞来る。

その蔭のほのとあたたか枯づつみ

強霜つよしもに今日来る人を心待ち

十二月十一日 長野ホトトギス会員来る。

その辺を一廻りしてただ寒し

十二月二十七日 迷子、菖蒲園来る。

昭和二十年

凍いてきびしされども空いに冬ふゆ日げん嚴

一月四日 毎日新聞より暦の句を徴されて。

彼かの道みちに黒くろきは雪ゆきの友ともならん

席むしろ垂たれ雪ゆきの伏ふせ屋やといふ姿

山道やまみちに雪ゆきかかれある小家せうかかな

一月七日 土筆会。小諸山廬。

雪踏みて乾^{かわ}ける落葉現はれぬ

一月八日 長野ホトトギス会員来る。小諸山廬。

櫛^{ほだ}の火の大旆^{たいはい}のごとはためきぬ

一月十一日 九羊会。鎌倉、星野宅。

枯菊も留守守^もるもの一つかな

枯菊に尚^{なお}色といふもの存す

必ずしも小諸の炬燵こたつあ悪しからず

一月十四日 句謡会。鎌倉草庵。

一ひとふゆ冬の寒さしの凌しのぎし借頭巾かりづきん

一月二十七日 在小諸。即事。

老犬の我を嗅かぎ去る枯木中なか

一月二十九日 小諸、懐古園。

鶏とりにやる田芹たぜり摘みにと来し我ぞ

二月一日 在小諸。 即事。

雪深く心はづみて唯ただ歩く

雪の道草くたび臥れし時杖つえをとめ

二月六日 在小諸。 即事。

書ふみ読むは無為の一つや置おき炬燵こたつ

二月十日 即事。

吹く風は寒くとも暖おそ遅くとも

二月十一日 毎日新聞社より暦の句を徴されて。

春しゅんちよう潮しゅんちようにたとひろかい艚ろかい櫂は重くとも

二月十五日 年尾長女中子、興健女子専門学校に入学の志望あり。試験を受く。

四方よもの戸のがたたく鳴りて雪解ゆきげかせ風

三月六日 長野ホトトギス会。小諸山廬。

風多き小諸の春は住み憂かり

蓼^{たてしな}科に春の雲今動きをり

三月十一日 在小諸。即事。

見事なる生^{なまし}椎^{いたけ}茸^{いわな}に岩魚添へ

三月十六日 在小諸。即事。

目薄くなりて故郷の梅に住む

四月十三日 在小諸。岩木つゝじに贈る。

紅梅や旅人我になつかしく

四月十四日 在小諸。懐古園に遊ぶ。

雪解水林へだてて二流れ
ゆきげみず

四月十五日 沓掛千ヶ滝。
くっかけ

誘はれて祭の客となりにけり

四月十六日 中込なかごめ、市川富雄宅。

木蓮もくれんを折りかつき来る山がへり

四月十八日 在小諸。即事。

我わが作る田はこれくと春の風

四月十八日 塩名田、白田恵之助を訪ふ。

城壁にもたれて花見疲れかな

四月二十五日 前橋、豊田宗作居一泊。

春雷や傘を借りたる野路の家

四月二十七日 村上村上平、杜子美居の祭に招かる。

耕^{たがやしくわ}の鋤かたげつつ訪^とひよりぬ

五月八日 杞陽、芙蓉来る。小諸山廬。

山国の蝶を荒しと思はずや

紙魚しみのあとひさしのひの字しの字かな

五月十四日 年尾、比古来る。小諸山廬。

兵燹へいせんを逃のがれて山の月の庵いお

五月二十七日 北軽井沢に桜間、野上両家を訪ふ。

麦の出来悪しと鳴くや行々子ぎぎやうし

夏草に延びてからまる牛の舌

六月三日 桃花会。小諸山廬。

田植見に西蒲原かんぼらに來し我等

六月十二日 新潟在味方村笹川邸にて大雪崩会。

蝙蝠こうもりにかなしき母の子守歌

七月一日 桃花会。小諸山廬。

木の形変りし闇やみや 螢ほたる狩がり

山と藪やぶ相迫りつつ螢狩

提ちようちん灯を借りて帰りぬ螢狩

提灯をさし出し照す螢沢

七月十六日 在小諸、沢の螢狩。立子、迷子、小蔦と共に。

浅間嶺あさまねの一つ雷かみ訃ふを報ず

八月四日 在小諸。矢野麻女の訃至る。

秋あき蟬せみも泣なき 蓑みの虫むしも泣なくのみぞ

敵てきといふもの今は無し秋の月

黎れい明めいを思おもひ軒端けんたんの秋簾あきす見る

八月二十二日 在小諸。 詔勅を拝し奉りて。 朝日新聞の需めに応じて。

更さら級しなや姨おば捨山すてやまの月ぞこれ

今朝けさは早薪まさき割る音や月の宿

九月二十二日 姨捨行。

ここに住み又秋風の寒き頃

寒き故此の秋風の好もしく

十月七日 在小諸。桃花会。土地の人の会と合併。小山五郎居。

日のくれと子供が言ひて秋の暮

ここに住む我子訪ひけり十三夜

十月十九日 調布。友次郎居。

深^{しん}秋^{しゅう}といふことのあり人も亦^{また}

十月二十一日 鎌倉草庵、小句会。

大根を干し甘^い藷^もを干しすぐ日かけ

十月二十七日 小諸山廬。長野ホトトギス会員来る。

木々の霧柔かに延びちぢみかな

さかしまに樽^{たる}置き上に冬^{ふゆ}菜置き

十一月三日 土筆会。小諸山廬。

大根を驚わしづかみにし五六本

十一月四日 土筆会。

船ふなびと人は時雨見上げてやりすごし

朽くちぶね船をめぐりて菜屑なくず去り難がたな

十一月五日 越前三国、愛子居。

老おいの杖運びて果す墓参り

十一月八日 丹波竹田、西山謙三宅。

菊きくの館たち五男それ／＼手をついて

十一月十日 但馬たじま豊岡、京極杞陽邸。

秋晴あきや或あるは先祖の墓を撫ぶし

草紅くさもみじ葉しぬと素顔そがんを顧みて

十一月十一日 但馬和田山、安積あづみ素顔邸。

夕紅葉色失ふを見つつあり

十一月十五日 名古屋八勝館、納屋橋句会。

聞き役の炬燵話の一人かな

十一月二十五日 戸倉温泉。長野ホトトギス会。

寒からん山廬さんろの我を訪ふ人は

炬燵出ずもてなす心ありながら

十一月二十七日 小諸山廬に素十、杞陽、春泥、芙蓉落合ふ。

来^きし人の我庭時雨見上げたる

二三子^{にさんし}と木の葉散り飛ぶ坂を行く

十一月二十九日 在小諸。三河、棚尾ホトトギス連中来る。

冬^{ふゆ}籠^{ごもり}座^ざ右^うに千枚^{せんまい}どうしかな

冬籠心を籠^こめて手紙書く

十二月二日 桃花会。小諸山廬。

冬の日の尚ある力菊残る

この辺は蚕の村か桑枯るる

山越えて来たり峠は雪なりし

十二月五日 松本浅間温泉たかの湯、松本俳句会。

炬燵にもあだには時を過ごすまじ

句を玉たまと暖めてをる炬燵かな

十二月六日 松本浅間温泉たかの湯、松本俳句会。

片^{かた}頬^{ほお}に冬日ありつつ裏山へ

枯^{かれ}蔓^{づる}の尖^{さき}は左の目にありて

十二月二十日 玉藻俳句会。鎌倉長谷、諸戸邸。

枯菊の色をたづねて虻^{あぶ}来たる

どこやらに急に逃げたる冬日かな

十二月二十一日 土筆会。鎌倉草庵。

山茶花さざんかの花のこぼれに掃きとどむ

十二月二十二日 句謡会、鎌倉俳句会合併。

枯菊むしろうに蕙むしろうのはしのかかりけり

冬枯の園とはいへど老の松

十二月二十三日 埼玉県不動岡、岡安迷子居、
子会しどみ。

うせものをこだわり探さがす日短か

思ふこと書信に飛ばし 冬ふゆごもり籠

十二月二十七日

立子、泰、迷子、孔甫こうほ、花守と共に稽古けいこ会をはじむ。小

諸山廬。

青空文庫情報

底本：「虚子五句集（上）〔全2冊〕」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年9月17日第1刷発行

底本の親本：「六百句」菁柿堂

1947（昭和22）年9月25日再版

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「俄《にわ》か」と「俄《にわか》」、「至る」と「到る」、「籐椅子《といす》」と「籐椅子《とういす》」の混在は底本通りです。

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。

入力：岡村和彦

校正：酒井和郎

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

六百句

高浜虚子

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>